



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.149
2016.2.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

47

「考古学に燃えた教師たちが 木曾考古学研究会を」

木曾教育会に郷土館委員会があって地域の歴史や民俗の調査をしていた。樋口昇一・森嶋稔さんの開田高原柳又遺跡の調査に地元の仲間として参加した。柳又遺跡が全国的に注目され、出土した石槍が『柳又有舌尖頭器』と呼ばれ学界用語となった。この尖頭器が木曾に無く担当者森嶋さんの手元一北信にあって遠い存在を木曾の仲間たちは口惜しかった。木曾に、木曾教育会郷土館に展示出来ないかとの思いが強くなったときの1967年10月に、県教育委員会による御嶽高原開発地域の遺跡分布調査があり、樋口昇一さんを団長に山下正六・伊深智・補助員に青沼博之・原寛等で実施された。32遺跡を確認し、このとき小馬背遺跡・西又Ⅱ遺跡で有舌尖頭器を採集し歓声をあげたという。この2遺跡の調査を自分たちの手でと計画した。私は分布調査のときは下伊那の中学校に、次いで県教育委員会に移り分布調査企画を担当した。2遺跡の調査費用をと68・69年連続で木曾での分布調査を実施し、参加調査委員の日当を調査費に当てた。68年小馬背遺跡 69年西又Ⅱ遺跡を調査し大きな成果をあげ、地元の仲間と調査するとの目的を達成した。この調査での団結から木曾考古学研究会を立ち上げ、2遺跡の報告書作成を目標にした。がリーダーがいなかったためか活動は停滞した。73年私は木曾の中学校に帰った。8月 木曾の仲間活を入れ報告書作成にと、芹沢長介さんを迎えて『縄文時代草創期学習会』を持った。私が調査概要・青沼が小馬背遺跡・伊深が西又Ⅱ遺跡を発表した。学習会には郡外24名県外9名。鈴木道之助・早川正一・片岡肇・増子康真・下村修・浅野晴樹・原寛・中村龍雄・小松虔・桐原健・林茂樹・御堂島正等の参加もあって充実した学習会でした。2遺跡への学界からの強い期待の現れであったが、それが二人の担当者に重荷になったことは否めない。一方 とにかく自分たちでとゆう気持ち

も高まって木曾考古学研究会の再発足となった。74年1月15日新年会を兼ねた6人の集まりで 会長山下・事務局青沼・会紙神村と分担し、月一回の学習例会・報告書作成の学習・郡内の遺跡遺物調査・木曾考古学研究会・郡内町村への働きかけ等を決めた。会紙『なかま』はガリ刷りで1-1~6・2-1~9・3-1~3の3年間18号を出した。会紙には必ず文献情報を載せた。郡内の遺跡調査では馬籠法明寺遺跡・日義お玉の森遺跡・福島関所跡・中央西線複線化用地内上松~福島間遺跡調査がある。こうして活動を始めたが3年目でつまずき、学校現場の忙しさや会員の郡外への転出もあるが、2遺跡の報告書作成に年々発展する学界に担当者がついていけなくなったのが大きい。地方に住み学界の動きを身近に出来ないことが遺跡の重みに負けたのでした。先日 学習会のファイルを開いたら一枚のメモが出てきた。『木曾考古学研究会 幻の「有舌尖頭器」考』—樋口昇一・森嶋稔さんの関わり—1.二人の初任地は木曾 2.旧石器を追って 接点は柳又遺跡 3.自分たちの手で調査したい 4.木曾考古学研究会を 5.刺激をと「縄文時代草創期学習会」 6.力不足と忙しさの中で夢は消える といった反省の構想項目が書いてあった。この2遺跡については国学院大学の開田高原での実習調査報告の中で簡単に触れてもらい学界に活字として残された。遺物は開田考古博物館に保管してある。

長野県は長野県考古学会として一つになっているが、広大な面積の県は山が隔て、いくつもの川が流れ先を違えて流れてそれぞれに小地域を作っている。地域ごとに考古学の仲間がいて活動しており、会活動がみられる。木曾考古学研究会もその一つであった。地域に年代層を超えての仲間がおり 活躍する中堅層の研究者が居る地域は纏まって活動している。特に佐久考古学会は着実な活動をしている。対して会員数も少なく、高齢者が多い木曾では研究会はいつの間にか休眠状態になった。私が亡くなれば木曾の考古学は残念だが途絶えてしまう。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。



▲草創期学習会で芹沢長介さんの講演



▲小馬背遺跡調査団

目次

- | | |
|---|--|
| ■田舎考古学人回想誌 考古学に燃えた教師たちが木曾考古学研究会を 神村 透 …1 | ■リレーエッセイ マイ・フェイスレット・サイト(第142回) 滝沢規朗 …3 |
| ■考古学の履歴書 過ぎし日の軌跡—女として考古学研究者として—(第10回) 岡田淳子 …2 | ■考古学者の書棚 「木に学べ—法隆寺・薬師寺の美—」 柳澤 亮 …4 |

考古学の履歴書

過ぎし日の軌跡 —女として考古学研究者として—(第10回) 岡田 淳子

⑩尖頭形石器を追って

打製尖頭形石器に関心をもったのは、新潟県津南町^{もと}で本の木遺跡を調査してからのことであった。この遺跡の調査は山内清男先生の研究費で行われ、芹沢長介先生と私がお手伝いしたものである。山内先生は石器研究をご自分のものではないと言われて、結局、調査に参加されなかった。

打製尖頭形石器のうち石槍は縄文文化には存在しないので、そのことを見極めてみてはという、芹沢さんからの助言があって始めたものである。弥生文化には磨製の石槍があるが、なるほど縄文文化には石槍は見つけられなかった。

先縄文文化には厚みのある木葉形の尖頭形石器があり、1950年代にはナイフ形石器の後に出現すると認識されていた。それを手がかりに縄文以前の石槍を追ってみると、日本では二つの時期が取り出せることが想定され、アジア大陸北部の石槍はベーリング海峡を渡ってアメリカ大陸につながると思われた。古コルディアエラ伝統の打製尖頭形石器(プロジェクトル・ポイント)である。北アメリカにはバイソンの骨と共に当時の沼地から発見された有名な「フォルサム・ポイント」がある。これは柄を装着するための縦溝を持つかなり精巧なものとして知られていた。1960年代半ばにはこれより古いものとして、サンディア洞穴とクロヴィス遺跡が調査されていて、私は何時かその遺跡を訪ねたいと思っていた。

好機到来、コロラドから南下した折に、夫を誘ってサンディア洞穴を探した。細い山道を流れに沿って遡り紆余曲折、一時間程してついに道路から約10mの高さに口を開いた「サンディア洞穴」を探し当てた。ちょうど「洞窟探検部」の大学生数名がやってきて、お互いに助け合いながら登って全員洞穴の中に入ったが、もし私たちだけだったら登れなかったかもしれない。若者たちはそんなに古く人が住んでいた可能性のある洞穴とは知らず、驚くべき情報を手にしたと喜んだ。1965年のことである。洞穴は奥が広く16畳くらいの広さがあり、前庭部から見下ろすと、遙か下に小さな流れに沿って山道が続いており、かつて狩猟対象の動物が水を飲みに来たであろう様子が目に浮かんだ。ここから出た石器、サンディア・ポイントはかつて米国最古と言われたが、今では否定されたままである。

同じ年、新進気鋭の女性考古学者シンシア・アーウィン・ウィリアムスが、国の大きな研究費(NSF)を得てワイオミング州「ヘルギャップ遺跡」の発掘調査を行っていた。ここに参加させて貰うことで、私はアメリカの大学が行う学術発掘を始めて体



▲米国ワイオミング州ヘルギャップ遺跡出土の石器 (1965年8月 発掘中に現地で撮影)

験した。大型 TENT を幾つも立てて、研究室の設備をすべて備えた「調査村」が造り上げられている。女同士のよしみでシンシアと親しく語りながら発掘を経験し、

学生たちの行動パターンも知ることができた。

座^{シユガー}って笹^{ピネガー}で石器を掘りながら「この暑さ、冷たいキュウリに砂糖とお酢をかけて食べたらどんなに美味しいだろう」などと言い、カチ!「先生、遺物です」と決して自分だけで遺物を動かすことはしなかった。石器は出土位置を記入し、直ぐに番号を付け小引出しに収納して鍵をかける。ここでの調査法は後に活かすことができ、私にとっては発掘を指導する方法を学ぶことにもつながった。私が見た出土石器の中心は、木葉形の打製尖頭形石器で、押圧剥離で調整しているように思われた。古コルディアエラ伝統を引き継ぐ石器と思う。遺跡の立地は大平原の水を得られる数少ない流れのほとり、その付近だけに緑がある。日本なら幾らでもあるこのような地形が大平原にはほとんど無く、遺跡密度の低さにも思い当たった。

1980年代になると、ピッツバーグの近くでメドウ・クロフト岩陰遺跡が調査され、12,000年前の年代が求められた。アラスカでもオールド・クロウが一時古いものとして騒がれたが、これは、古くないことが確かめられて、不発に終わった。

1996年、未だ果たしていなかった「クロヴィス遺跡」を訪問する機会を得た。クロヴィスは都市の名前で、遺跡名は、ブラックウォーター・ドロー遺跡 第1地点(Blackwater Draw Locality No.1 Site)であることを知った。その当時、シカゴの自然史博物館にいた友人の Jim Dixon に、調査を続けている Joan Dickinson を紹介して貰い、彼女の案内で充分に見学することができた。

最初に発見されたのは、1932年砂利取りのための作業中だったという。その後、1964年に大掛りな発掘が行われ、1983年よりイースタン・ニューメキシコ大学によって調査が続けられていた。台上の地表より梯子で数メートル下まで降りると黒く見える流れがあり、先フォルサム型のポイントを含む石器や骨などの遺物は、そこの砂利層から発見されているという。私たちが訪れた時は井戸(泉)が見つかって、その付近を発掘中であった。年代は12,000BP、アメリカ大陸では古い年代が出ているとのことである。

強風の中を一時間ほど案内してもらい、Joan と一緒に地上へ上がる。遺跡の上には博物館が造られる計画で、その企画が進められていた。関連のジオラマを見た後、タンブル・ウイード(丸い枯草)が強風に転がる中、近くの町サンタ・ローザに向かって車を走らせた。

略歴

1932年	東京府豊多摩郡代々幡町(現渋谷区初台)に生まれる
1949年	東京都立第五高等女学校 卒(学制改正)
1950年	東京都立富士高等学校 卒
1955年	明治大学文学部史学地理学科(考古学) 卒
1958年	東京大学大学院生物系研究科(人類学)修士修了
1961年	明治大学大学院文学研究科(史学)博士単位取得
1961~64年	東京都立武蔵野郷土館学芸員(常勤臨時職員)
1964~66年	米国ウイスコンシン大学人類学部 研究員
1967~77年	国立(クニタチ)音楽大学 専任教員
1978~88年	北海道大学理学部・文学部 専任教員
1988~2004年	北海道東海大学国際文化学部 専任教員(1998年より特任)
2010年~現在	北海道立北方民族博物館 館長(非常勤)

隔月連載です。次回からは間壁忠彦先生、間壁霞子先生の連載が始まります。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 142

元屋敷遺跡 ～新潟県村上市～

滝沢 規朗

1995年の春、県に所属していた私は県営奥三面ダム建設に伴う発掘調査を行うため朝日村教育委員会に派遣される。派遣期間は2年と伝えられた。学生時代は古墳時代が大好きだったため縄文時代の奥三面遺跡群への関心は高くなく、派遣されて初めてこの場所を訪れることとなった。

毎日、7時半過ぎに廃校を利用した奥三面遺跡調査室に集まり、朝日スーパー林道の曲がりくねった道を約50分かけて現地入り。初年度はアチャ平遺跡中下段の調査。翌年の夏に終了したのち、既に開始されていた元屋敷遺跡の調査に合流した。

元屋敷遺跡は既に3年間調査行われており、斜面の捨て場から出土した縄文時代後晩期の膨大な遺物が奥三面遺跡調査室の保管場所（廃校の体育館）に堆く積まれていた。1996年からの調査は集落本体の居住域。遺構確認面まで調査するように指示された。黒色土を少しめくると、多くの遺物と共に礫が検出された。ぼんやりと何かが見えてくる。道路状遺構としたものの確認後、川を挟んで東側に向かうと沢山の配石遺構が検出された。黒色土中からこんなに礫が多くでるものかと思いつつの調査。礫としたものの中には磨石や石皿、磨製石斧の未成品なども多い。配石遺構をどのように解釈すべきか。動いた石はどれで、原形はどうだったのか。脚立に上ってぼんやり眺める時間も少なくなかったと思う。

初年度の夏頃に道路状遺構としたものを報道公開した。大きく取り上げられた結果、現地説明会では600人もの方々が訪れた。無我夢中で調査した初年度が終了した。派遣期間は2年であったが、文化庁坂井調査官(当時)から「縄文の原風景が見える」「残って調査を」と言われたこともあって、派遣の延長を申し入れた。元屋敷遺跡の調査2年

目(派遣3年目)には調査担当となった。

冬場、朝日スーパー林道が崩れたこともあって、通常のルートでの現地入りが不可能。数ヶ月間は山形県小国町経由が現地に入る。通勤4時間半、現地滞在3時間程度と記憶している。遺跡内の湧水地にトチの実が敷き詰められた遺構が確認された。トチの実をはじめ、クルミなどの堅果類に関心をもったのもこの頃である。もの珍しいさも相まって、遺跡周辺の沢に入って木の実を採集すると毎年、安定した収穫が得られないことを知った。

調査最終年は、黄褐色土で確認した柱穴や竪穴建物の調査に終始した。初年度2名体制の調査員も5人にまで増員してもらい、秋には他遺跡の調査が終了した調査員も合流して大所帯となった。ただし、掘れども掘れども終わりが見えない日々が続く。調査期間中に我々の喉を潤してくれた湧水の流れが変わったことが分かり、人工的に掘った川と判断した。國學院大学小林達雄先生、文化庁岡村道雄主任調査官(当時)をはじめ多くの先生方から指導を得た。文化庁の絶大な支援もあり、報道等で大きく取り上げられた。縄文時代後晩期集落の全面発掘。多くの方々に見てもらいたいと思い何度も現地説明を行った。減少傾向にあった参加者もこの年には激増。「秘境」「ダムに沈む縄文遺跡群」などの形容詞も人を引きつけたと思う。

現地調査終了後の1999年からの3年間を含め、朝日村教育委員会に7年間お世話になった。あまり形にはなっていないが現地で寝泊りし、歩き、石材や植生を含めた環境を考えたことがなつかしい。このような大遺跡の調査・報告を自分がしてよかったのか。時の経過と共に考える機会は少なくなったが、今も心の片隅に残る。調査・整理には、優秀な人員が囑託員と集まってくれ、信頼できる上司と彼等のおかげ

で何とか形となった。今も文化財保護に携わる職員として活躍している方も少なくない。会う機会は減ったが、今も感謝の気持ちで一杯である。2015年、国重要有形文化財に指定された出土品。「縄文の朝日」で展示中である。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは富樫 秀之さんです。



▲元屋敷遺跡全景

考古学者の書棚

「木に学べー法隆寺・薬師寺の美ー」

西岡常一 著／小学館文庫(2003)

柳澤 亮

テレビ番組の制作者、内藤誠吾が書いた「千年の釘にいどむ」という短文に触れたのは、小学校5年生の国語教科書(光村図書)である。中学1年の次男坊が小学5年の頃、居間で大きな声で音読していた。その6年前には大学1年の長男坊も音読していたのかも知れないが、あまり記憶にない。

「千年先のことは、わしにも分からんよ。だけど、自分の作ったこの釘が残っていてほしいなあ。…(中略)…これは職人というものの意地だね。」文末で話の主人公である鍛冶職人、白鷹幸伯氏が語っている。1970年に始まった薬師寺再建計画は、戦国時代までに焼失した建物群を1300年前と同じ工法で再現しようとする壮大なものであった。白鷹氏は材料の釘作りを任せられ、鉄素材、形状や硬さまで詳細な検討と試作改良を重ね、2万4千本もの釘を作ったという。

この釘作りを依頼した人物が、『木に学べ』の著者で、当時薬師寺宮大工棟梁の西岡常一氏である。西岡棟梁も白鷹氏もNHKなどのドキュメンタリー番組でその仕事ぶりや人となりを観たことはあった。私が『木に学べ』の文庫本を長野市内の書店で手にしたのは2010年以降だったと思う。その元原稿は1985年からアウトドア月刊誌『BE-PAL』(小学館)に連載され、1988年には単行本化されている。西岡棟梁は1995年に満86歳で亡くなっているが、ベストセラーとなった単行本が2003年に文庫版として出版された。

2006年から2008年まで、私は長野県佐久市で大規模な集落遺跡、西近津遺跡群の発掘を担当した。弥生時代後期から中世鎌倉時代まで続く濃密な遺構群は、標高700m以上の冷涼高燥な佐久平を開拓した先駆者たちの生きた証である。その遺跡からは全長18mを超す長方形をした、弥生時代後期の巨大な竪穴住居跡が発見された。その床面積は弥生神殿とも称された大阪府池上曾根遺跡の巨大な掘立柱建物跡をも凌ぎ、弥生時代の竪穴住居跡の調査例としては国内最大クラスとあって、担当した私たちばかりか弥生研究者らも随分驚かされた。床面に残る支柱穴は4か所で、その深さは1mもある。柱穴の底面形から支柱は幅50cm、厚さ25cm規模の角材を使用していた可能性も出てきた。これほど大きな住居の上屋を太い角材4本で支えた建物を推定させる調査所見は、まだ原始的なイメージの強かった長野県内の弥生建築から懸け離れた印象を受けた。

発掘を終え、報告書作成業務になってからも、その建物の意味づけに悩んだ。有力者の居宅、神事祭事を執り行う祭殿、地域の集会施設などといった推定案を報道機関などに対し提示したが、発掘調査の記録や遺物類を検討しても、推定案のどれをも決定づける根拠は得られないでいた。

2009年には職場の研修で奈良文化財研究所主催の建築遺構調査課程を受講する機会を得て、1週間ほど奈良に滞在した。建築史を専門とする講師陣に発掘調査からわかる古代建築の特徴を学び、法隆寺や日本民家集落博物館(大阪府)を訪ね、実際の建造物を前にして仔細な説明を受けることができた。

そこには飛鳥時代から古代を経て、近現代まで続く建築士や職人たちの仕事や技がしっかりと残されていた。

それから数年して先の教科書や書籍で白鷹鍛冶職人と西岡棟梁に出会った。白鷹氏の和釘つくりを読みながら、坂城町の宮入鍛刀道場に宮入恵刀匠(現宮入小左衛門行平刀匠)を訪ねた事を思い出した。1993年に同町の小山製鉄遺跡を調査した後、実際の鍛冶業を見学させていただいた。日中でも薄暗い工房内に立ち上る炎の赤、刀匠が鋼を鍛える槌音に合わせて爆ぜる火肌と湯玉。工房の片すみで木炭の小割作業を黙々と続ける職人見習いの青年。和釘つくりにも日本刀つくりにも古来技法を伝え守る現代の職人たちの心意気や息遣いを感じた。

『木に学べ』の中の西岡棟梁は驚くほどに饒舌である。法隆寺境内や薬師寺の白鳳伽藍復興奉行所で雑誌編集者に話し掛けたままに語り下ろした文章は軽妙で、あたかも私の隣に棟梁が立って、関西弁で飄々と寺社案内や古建築案内をしてくれているような錯覚をも覚えた。7つある章はヒノキの素晴らしさに始まり、道具の大切さ、法隆寺の古代建築や薬師寺再建に懸ける執念、棟梁という役割、宮大工としての技術や心構えを、寺社建築というどちらかと言えば取っ付きにくいはずの分野の話ばかりなのに、分かりやすく教えてくれる。高名な建築学者と復元案について真つ向勝負する場面は痛快で、法隆寺発掘の陣頭指揮を執る場面はことさら面白い。

そして、ただ面白い読み物ではない。樹齢千年のヒノキを使って1300年経っても残る法隆寺。その観察と修復から当時の工法と技術力の高さを知り、祖父から受け継いだ宮大工棟梁の口伝を会得した西岡棟梁ゆえの建築論がどのページからも溢れてくる。

佐久平に建てられた弥生時代の巨大建築物。それは有力者や為政者の要請によるものであっただろうが、建築を手掛けたのは当時の最高水準の建築工法を知る大工職人であったはずである。木取りから道具の準備まで手抜きなくこなし、職人集団を束ねた棟梁の活躍もあったのではないか。地下に凹凸としてだけ検出された遺構であるが、そこに武骨な手をした弥生時代の職人たちが立っているように感じさせてくれた。

「木を知るには土を知れ」、「木を組むには人の心を組め」、「住む人の心を離れ住居なし」。プロフェッショナルとしての西岡棟梁の言葉はひとつひとつ重く、深い示唆に富む。これから携わる遺跡調査、文化財保護の現場で、文化財として今に残る遺跡や遺物、建造物を前にして、まずはそれらをよく見て考え、いにしへの職人たちの声や心聞き、学ばなくてはならない。一人前の仕事をするための心構えを覚えてもらった気がする。

アルカ通信 No.149

発行日	2016年2月1日
企画	角張淳一(故人)
発行所	考古学研究所(株)アルカ 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299 aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp